

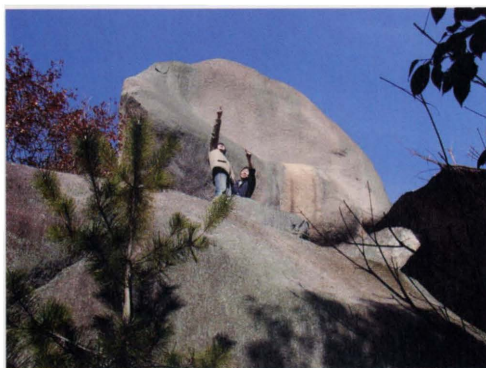
古代尾道景観考

尾道の景観構造図 (太陽・岩・山、そして寺院の関係。)



*太陽の運行と方位などのデータは市販の天体運行ソフトを使用。
ちなみに、2000年前の日の出、日の入の方位も現在とほとんど変わっていない。

ヴァーチャル尾道研究レポート



岩屋山巨石を西側底部から望む (向島・岩屋山)



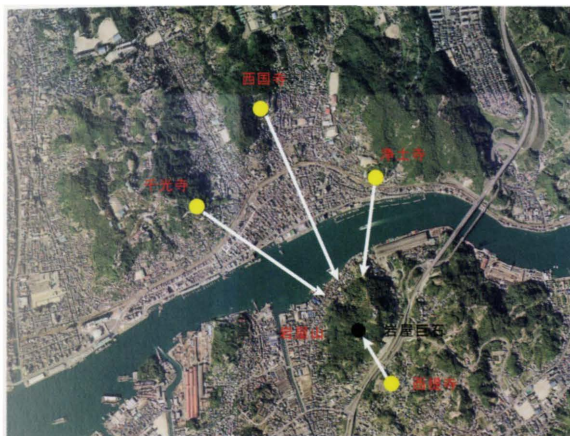
岩屋の向かって左側壁の岩に刻まれた線刻

尾道三山にある浄土寺、西国寺、千光寺が対岸の、対岸にある岩屋山に向けて建造されている(児玉講師説)のを確認。何かがこの尾道の景観に隠されているのではないかと疑念を抱くそしてそれらが古代の景観造形であったことを確信する。

藤原京と同様の、三山と四神(白虎、青龍、朱雀、玄武)の構図(児玉講師説)が伺える。その可能性を探るために、調査が続けられた。中世以後は安倍晴明の考え方が定説(東に大きな川、西に大道、北に高い山、南に湖沼、平安京の構造である)となっている。尾道はそれとは異なった、地理的条件で構成されている、平安京より古い藤原京と同様の古代的景観構成である。そして「山」と「岩」と「太陽の運行」が連環している景観構成である。

尾道三山の浄土寺の十一面観音菩薩、西国寺の如意輪観音菩薩、千光寺の千手観音菩薩、そしてその尾道三菩薩が正対して見つめる岩屋山。対岸にある向島の西提寺の聖観音菩薩(本尊)と西提寺(岩屋山が寺領)の山号の補陀山(菩薩の住地)は、全ての関連を考慮すると、菩薩曼荼羅と言ってもいい仏像構成になっている。日本国内でも珍しい菩薩像の作る四山に構成された、空中寺院景観である。

尾道三菩薩がその視線を向けている、向島岩屋山、その巨石の調査はもっとも重要な手がかりとなった。その岩には古代の線刻が刻まれている。なぜこのような線刻がこの岩に刻まれているのか。



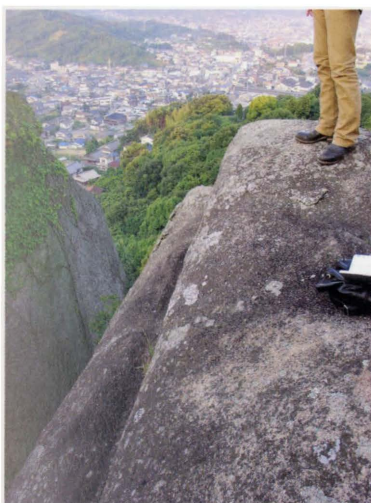
四山と寺の配置図、シンメトリカルに配置されているのがわかる
これが当時の学者が計画設計した景観デザインである



千光寺本堂と冬至の朝日



本堂裏山にある割れた岩

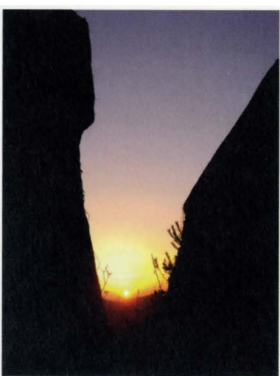


巨石割れ目の頂上部分に直線的に割ろうとした痕跡が見られる、そしてこの割れ目の痕跡の角度が、北を基点にして、東の方角60度、西に向かって240度に直線的に走っているのである。割れ目東側60度の方角は夏至の朝日の昇る方角、割れ目西側240度は冬至の夕日の沈む方角である。

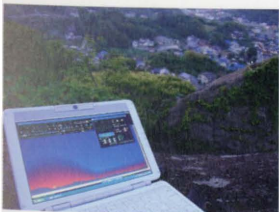
岩屋山巨石頂上、左の蔦岩が割れた対の岩



夏至朝日が割れ目東側から昇る



冬至の夕日が割れ目の西側に沈む



朝日の昇る角度を確認する

冬至の朝日が、岩屋山の山頂から昇り、その朝日は千光寺本堂を、正面から射抜く。冬至の朝日を、本尊の千手観音菩薩像が、拝み見る構図になっている。

2003年冬至の日、NHKの取材放送で、尾道にある、冬至の不思議な現象として全国放映された。また広島ホームテレビとNHKではニュース特集として、尾道の景観構造の不思議を、空撮取材していただいた。

千光寺本堂裏の斜面に、「石槌山」と名付けられた、縦に真二つに「割れた岩」があるが、この割れた岩の隙間から冬至の朝日が岩屋山の山頂から昇る。つまりこの「割れた岩」が古代（自然信仰）からあり、次に仏教伝来以後、仏教寺院である千光寺が建造されたと考えるべきであろう。千光寺本堂、浄土寺、西国寺、西提寺の建造を指示したのは、この四山に秘められた根本思想を知っていた学者である。

岩屋山巨石の調査

まず巨大な割れ目に注目した。巨石の頂上に登ると、人工的に割られた跡のようなものがあった。

はじめは巨大な割れ目なので、人造とは考えにくかったのだが、この割れ目も千光寺の「割れ岩」と同様に太陽とリンクしてるのではないかと考えるようになった。

現代の技術では、この巨大な花崗岩は、割ることは非常に難しい、という事であったので半信半疑だが調査してみる。

東西方向に割れている割れ目、まず考えられるのは、西の方向であった。西は夕日の、沈む方角である。冬至の日の夕刻、ここに来てみた。はたして、夕日はこの割れ目に沈んでいったのである。

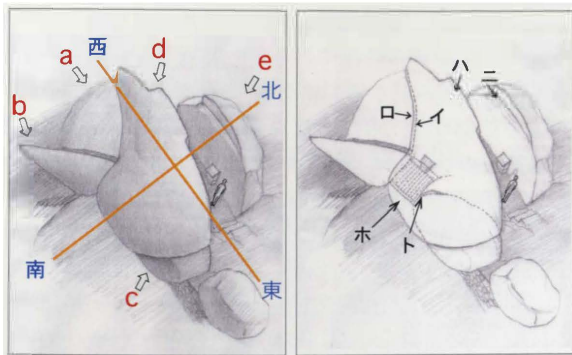
西の割れ目に、冬至の夕日が沈むだけでは偶然の可能性もある。そうなれば、調査は割れ目の東の方角である。

東で考えられるのは夏至の朝日である。冬至の朝日は千光寺から見て、岩屋山頂から昇る事が確認されているので、夏至の朝日しかない。そうであってほしいと考えながら、岩屋山巨石に向かう。早朝4時56分、夏至の朝日は岩屋山巨石の割れ目に昇ってきた。目の前に雑木林があり確認は容易ではなかった。

これらの事実により、この割れ目が自然にできたのではなく、人為的に造形されたと考えられる可能性が大きくなってきた。つまり、千光寺の冬至の朝日、この岩屋山巨石の太陽との関連すべてが、自然現象とは考えにくいということである。

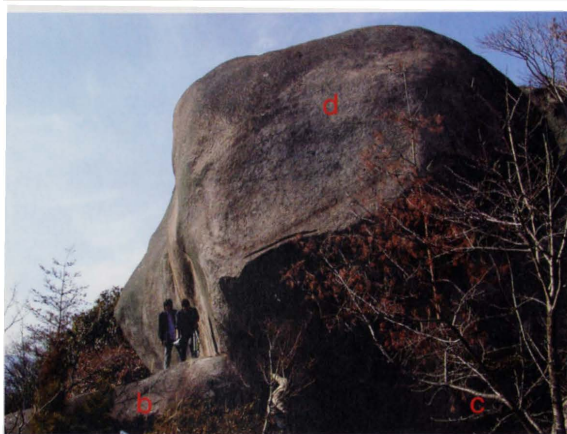
そうであれば、その他にも実証できるものがないのか、再度調査する。今回は、I氏の協力を得て、太陽の動きが、パソコン上で観測できるソフト（ステラナビゲーター）で、いろいろ試みてみた。このソフトは過去でも、未来でも太陽の観測ができるソフトである。その前に岩屋山巨石の真二つに割れた痕跡の方向角度を計測してみた。パソコンで割り出した冬至の太陽の沈む方角と、夏至の太陽の昇る方角と、岩に残る痕跡とはほぼ一致していた。

ちなみに2000年前もほぼ同じ角度で太陽は運行していたことも付け加えておく。



岩屋巨石鳥瞰図
a,b,c,d,eの五つの岩で主に構成されている

岩屋巨石透視図
ハとニは割れた岩
ホは岩屋(祠)部分
トに磨崖仏あり
イとロは三つの岩の接合部



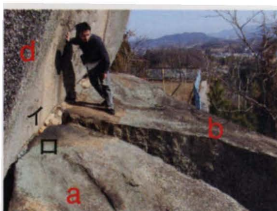
岩屋山巨石全体を南側から望む (dの岩の背面が割れている)



西側兼吉方面から望む割れ目



eの岩西側壁の人工的破断面



イとロの三つの岩の接合部分が一致している。自然にはあり得ない



ホの祠(岩屋)部分、現在は薬師観音が祀られている



ホの右側壁の最大の仏像、それを取り囲むように小さな仏像が配置されている



ホ部分、岩の祠右側壁に磨崖仏が掘られているが、この壁面の角度が冬至の朝日の昇る角度120度になっている。

このような巨大な岩を割り、コントロールして重ね合わせる造形ができるものであろうか。この岩屋山巨石は、巨大な五つの岩から構成されているのである。自然を信仰していた古代人も天体の運行、夏至、冬至を熟知していた事にもなる。尾道以外に、このような造形巨石と明確に太陽とリンクさせ、しかも四つの山を取り込んだ景観造形と構造物がこの日本にあるだろうか。

このような事実から、もっと人造物の痕跡がないか、調査を進め新たな発見があった。冬至の朝日とこの岩の祠の関係である。

岩屋山の名前にもなっている、この巨石の岩屋(岩でできた祠)部分が冬至の朝日に向けて造られていた。山と岩という自然物を応用しながら、日本人の太陽信仰のかたちである。そして思い浮かぶのが古事記、日本書紀に登場する「天照大神」である。

- ①「岩屋山」という名称の山がある。
- ②「岩屋山巨石」の岩屋(岩の祠)が冬至の太陽に向けて造られている。
- ③「岩屋山巨石」の巨大な割れ目が夏至の朝日と冬至の夕日の方角に割られている。
- ④千光寺の「石槌山」という岩の割れ目に、岩屋山山頂から冬至の朝日が現れる。
- ⑤この状態、状況が日本の神話に似ている。(北欧では復活祭として冬至のお祭りとして残っている)

その神話とは「天の岩戸」神話である。

「天の岩屋」「天の岩屋戸」「天の岩窟」「天の磐戸」とも言われている。古事記(上つ巻)、日本書紀(神代七段)にてでくる著名な神話である。

「天の岩戸」神話を簡単に解説すると、日本の神々の生まれた頃の話で、イザナギの命(みこと)が左目を洗うと、天照大神(あまてらすおおみかみ)が生まれ、鼻を洗うとスサノオの命が生まれた。スサノオの命が神聖な神殿をけがしたりして荒ぶるので、天照大神は恐れて天の岩屋におかくれになった。天照大神は太陽神なので、天地が真っ暗になり、災いがたくさん起こった。心配になった神々は、岩屋から出してもらおうと、祭りをはじめた。あまりにも外が騒がしいので、気になった天照大神は、岩屋戸を少しあけた。そこを力持ちの神が岩屋戸を引き開け、天照大神をこの世に出す事に成功した。そして世界に光がよみがえった。という日本の神話である。

結論から申し上げますと、この神話の地上の写し絵的景観を山陽道の中心地域、ここ尾道に創造したのではないだろうか。この尾道と向島の岩屋山巨石で明らかになってくる現象と事象、また造形物などが、あまりにも「天の岩戸」神話が似すぎている。また岩屋山巨石は巨大な人工造形物であり、現代の科学技術では不可能な造形物なのである。「天の岩戸」といわれ、「天」とついているのは天上界の神話である、だから天文学を駆使して太陽との様々なリンクを尾道四山(尾道三山と岩屋山)とこの巨石などに施したのではないだろうか。



「石槌山」と名付けられた割れ岩を下から望む
二つに割れているのが確認できる(千光寺)



玉の岩
宝珠岩又は烏帽子岩とも言う



鏡岩
伝説はあったらしいが2000年に発見される

「天の岩戸」神話のその後のスサノオの命であるが、根の国に追放される。その途中に出雲の地に降り立ち、八俣の大蛇(やまたのおろち)を退治して、その大蛇の尾から草薙の剣(くさなぎのつるぎ)を取り出し、天照大神に献上するという「八俣の大蛇退治」神話だ。この二つの神話は古事記(上つ巻)を見ると、対をなしていることがよくわかる。

(ア) 鏡を懸け珠を吐きて、百王相続し、

(イ) 剣をかみ蛇を切りて、万神蕃息せしことを。

(ア) の注釈 鏡を懸けは「天の岩屋戸」の故事。

珠を吐きては「天の安の河での誓約」の故事。

百王相続しは(代々の天皇が皇統を継ぎ)の意。

(イ) の注釈 蛇を切りては「スサノオの命の八俣の大蛇退治」の故事。

万神蕃息せしことを。は(すべての神が繁栄することを)の意。

新潮社 新潮日本古典集成(第二七回)古事記 から参照と解説されている。始めの行の(ア)では「天の岩屋戸」神話を意味し、文章中に鏡と珠を配置し、次の行の(イ)では「八俣の大蛇退治」神話を意味し、退治して剣を取り出すのである。つまり(ア)の文章で鏡と珠を、(イ)の文章では大蛇を退治して剣を取り出し、(ア)と(イ)の文章で、三種の神器を構成している。

その古事記の神話が、尾道にも隠されている。

一つは冬至の太陽(一年で太陽が一番弱まる)が正面から出現する、向島の岩屋山巨石にあった造形物と太陽との関係。古事記との、第二の類似点、それは千光寺の岩である。「天の岩屋戸」の故事の部分では鏡と珠があり、次の「八俣の大蛇退治」の故事、すなわち出雲に移動して剣が登場し、二つの神話で、三種の神器が完成される。つまり出雲は架空の場所ではなく、山陰に存在する現実の場所であるが、「天の岩屋戸」の「天」は天上世界のことであり、この地上に存在しない。だから神話の地上絵として創造した場合、瀬戸内の中心に位置する、ここ尾道を遷地したのではないだろうか。美しい四山が存在し、自然環境が整っていたのである。その証に、ここ尾道千光寺には名所として、自然石を応用した、「鏡岩」と「玉の岩」が存在し、「剣岩」はないのである。(ア)と(イ)の文章に酷似している。

千光寺は先に述べたように、石槌山と名付けられた、縦真二つに割られた岩があり、その割れ目から、岩屋山の山頂から昇ってくる冬至の太陽を観察できる所でもある。(もちろん千光寺本堂も太陽とリンクしている)この事実が第二の類似点としてあげられる。剣岩があるとすれば、出雲にある可能性がある。またここ尾道には、昔から出雲街道が存在し歴史街道としてその名が残っている。出雲との関係が古くから残っていた証である。

一年間の太陽の運行で、一番太陽が衰え、日照時間が短いのが、冬至である。その衰えた冬至の太陽を、天照大神(日本の太陽神)の岩屋戸隠れに見立て、岩屋山と名付けた山頂から昇ってくるように、環境設計されている。

北欧スエーデンにもロシア祭という祭りがある。闇を砕く光の聖女ルシアを祝う国を挙げての大きな祭りで、一年で一番暗くなる旧暦の冬至の日に行われ、キャンドルライトを灯して祝う。また「ルシア」は光の単位の「ルクス」の語源といわれている。闇を砕く光の聖女ルシア、天の岩屋戸から出現する天照大神という女神、岩屋山の山頂から冬至の朝日が出現する、この尾道にある光景を何に例えたらいいのだろうか。かつては密かに祈ったり、祝ったのかもしれない、今日本には冬至の日の太陽神の復活祭は残っていない。

「天の岩戸」という古事記、日本書紀に出てくる、神話として残っているだけである。また尾道の冬至の朝日は、千光寺本堂の本尊千手観音像を射抜くように照らす。この寺の名前も「千の光の寺」と名付けられたのも、理解できる。この寺の建立場所が、冬至の朝日を向島の岩屋山頂から受けるために、今の場所であればいけなかった、だからこそ中国地方では稀な舞台造りとなり、岩肌へへばりついたような難所に建立され、それが風光明媚といわれ、数多くの観光客が訪れている環境をつくっている。冬至のご来光を拝んでいるのは、まだ地元有志のみである。千手観音像に背を向けて、観音様と一緒に太陽を拝めるのは、この日だけかもしれない。